

万葉物名考

上

内閣文庫				内	第
函	冊	號	類	和	書
三	三	八六二		書	
架	冊	號	類	共	

和書門			
冊	架	函	號
三		三	八六二
架	冊	函	號

内閣文庫		
番號	和	8612
冊數	3 ( 1 )	
函號	200	198



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

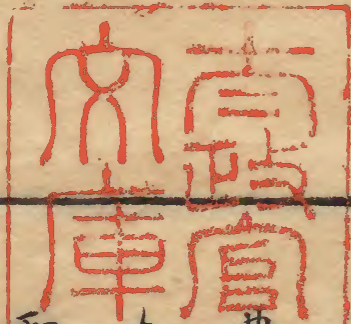
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







左依羅乃小野

大地之部



天路

左之羅板男

夕星

豐儀雲

左島

西海

安由能風

月談男

星月夜

殿曇

霜雲入

山霧

日方

浮津

日之

月人男

卯花月夜

棚曇

波多列

飄

花多風

依保風	泊瀨風	湊風
旋波曾乃凡	物恰函	刺並之函
向依玉	脊友函	國乃波多豆
夷		

山野河海之部

須蕪美乃山	村山	美豆山
見奈疑之山	卯花山	山乃曾波
地乃曾波	草凉地	五百代少田
小壑田	子少田	小里
夜叉奈美乃里	海界	之麻美尔

目 一

色	輕川	夕川
可波彼	納潭	儲滿

道路之部

熊末乃夜良		
熊道	直道	木其開道
跃路	与奇道	海津路
四路道	道之阿曲	

水泉之部

始水道	水浪	宇頭沙
潮在乃	汐気	青波

五百重波

濱木綿

土石金玉火之部

直土

真朱

涌津懸村

常滑

久我祿

多麻波能多麻

足玉

手玉

珠之七條

雲集乃玉簾

竹玉

油火

世之部

夜初世

歲時之部

年乃羽

年乃緒

天之足夜

伎賊乃夜

加波多礼等伎

神祇祭祀之部

龍田彦

久志美多麻

小集樂

耀歌

神依板

倭文幣

真骨本綿

短本綿

仙仙器之部

女餓鬼

男餓男

之多淑乃使

幡幢

氏戸亦

葵具之部

於久於伎

万葉物名考卷之上

天地之部

左サ佐羅ラ乃小地チ

三 名酒竹のまき玉辛次くひるふ尾く天有左佐羅  
乃小地乃七經表之

左佐羅ハ七とあれあとも義なるを。れあを(ら)と約て名  
とせりなり。阿れを生也。このまきひららくとも義なる也。  
(七)と約めくまきといへるまき也。天をさくまきら乃  
小地と云也。この名付る地乃一亦天まけり云ふにあす  
下まけるひの表系と同義也。まき乃糖乃糖或ひありのまき也。

後ひ後あとをねくといふ也。天は日月の相後ひ擔り  
とむなれは。そののふれと号はるなり。月をさくらえ男  
と云は。このやうに世に居る男と云ふ也。天はる男と  
云ふはひと。

ヒノスカラ

ひのすつらひ ヒモエスカラ 日燃者系と云義なるを。りえを(め)と約く  
ひめすつらといふなり。すつは法なりを。借く者と云ふ。  
系は孫あるやなれは。法の訓義者の名義同し。此は也。  
日燃者系ハ天と云義なり。うる名付る神乃天よあ

上  
一

里と心ゆるハ。笑あはたり。

ウキツ  
浮津

ハ天川浮津の波音とわく也。昔侍多。一毎里す。一も  
浮津の名をりつら。き名也。此ハ天漢がそハ云。一き名ハ  
ハあきむ。天川と云も浮る名なれ也。抄合さ。浮  
津とも云へりなり。

アキチ  
天路

ユ久々の阿麻延ハ遠くがわく。家よりく。なりを打取  
あする。まの義なり。あまハあめ。あは。天よあら。は。く。は  
云義なり。





十五 大舟よまのちあぬき海鳥とよひくわる月人男  
 月人男八月の一名なるより四夜よつれはさるるを定めて  
 まるる人男なり。されどこの月人男と云ふ。万葉集中七名の  
 歌よと云ふより。考へるべし。此の年牛の一名とあはせり。  
 そをいふと云ふ。月人八月日止と云義より。月止も止まる。あ  
 り男と云義なり。素戔嗚尊ハ一手中。女月七日は止りて織葉  
 逢と云星なれ。月日止男と号し。まやあむ人と云ふ  
 傳ふなれと。日止と云義はらぬと云ふなるものなり。月の一  
 名なりと云ふ名義も從ふ。さらふ卷十ハ  
 りみちのつよなるし。月人の梅の元と名をいふ。これハ

上 二

と云ふことなり。この月人乃梅とつらる。さ乃桂とい  
 へる。同じに梅ハ。桂月一名の布（書）也。されどこの月人の桂  
 とつらる。と云ふ。此の布實なり。つらる。さ乃桂とい  
 へる。星の名はまれ。男と云名を喚け。月と人とき云  
 義と云ふ。さ乃のつらると云ふ。さ乃のつらる。このつら  
 りみちのつらふなり。ぬとさ乃のつらる。なれ。なとあり。つらる。を写  
 して。後ハ。さ乃やあむむ。

タツ星

三 うつをささき。皆ひし。なえて。夕星のつらる。つらる。と  
 世の人のまき。夕星のつらる。なれ。なれ。と





ふと〜いふなり。

ヒサメ  
二 西海

二 様子よはぬ物く。また毒人のなかなきこひとあふ  
、あはれなき

ひとあはれぬ〜ゆと云々なるを。志あを(と)とつめてひとあふ  
云やうそふぬ也。

ロニキリ  
山 五務

十九この時おのゝの山等のいふをよ昔胸後をこひやま  
山等と結ひていふ事。は二その外はハるるあな。

ウハシ  
炎

二 かにまもゆしきうもこ取りるゆをのちのちのちのち  
あかおのを〜よつ山も、まはりしるるさき  
名義考凡の形よこよなり。

アエノヤセ  
安由能風

十七いづ河津ふらあはよ由あき〜そのまこれハ安由結か  
是とくしふはらき

越俗东风謂之安由乃可也。名義知る。

ヒカタ  
日 五カ

七 天等ひひこふ〜水笠の曇の水間は波を返る  
日方ハ未申の方より吹風也。土佐人等南風を云とる。



柯拾玉

一也まをみむしふあれをきし海系をのまのこもくし物  
拾むりあまうし中や戸とあらけりは  
う中しあは熱飲しるあしと云也。①ハメ候るの果也。常  
に和痛くうまししと云も日也。名と理との差あまの  
名となりてを抄用なり。

刺並之玉

六 大忌のこととてとみ刺あまのあまをますやあまのあまを  
しりなると相向ひ指並ひる玉をいふなり。畧解も云  
卷九長款。指並の隣の玉はとて。こハ能得と土佐と海

上ハ

をいふこととてとみ刺あまのあまをますやあまのあまを  
道。西海及。東海東山及。山陰山陽及。北陸及。並ひ  
るを指しなるといふなり。

向依國

二 三玉の向依玉のあまをいふ人ハ白皇祖の神の御門  
イイ

北月友の玉

一 三玉の向依玉は若依玉と云也。向依居り向依隣と共なり。  
ニ かな中らもゆしあしりもこハ福忌、我大忌のよこ  
めす脊友の玉の志未立不彼山款と云







山野河海之部

須彌美乃山

七 いていゆきめらるる山つらむこのりくむすめら

こ乃須をみ山乃一あふのあふのありそふき

すそみ八槍雨細り止る山と云ふ也と記す。裾色の山と云

ふ回

村山

一 ねまともむら山あれをとりまうふき

むら山をむれあ約。群影いさく山と云ふなり。

美豆山

一 畝火のこのころ六日のぬきの大寺門不陸山と山と

いひまうすき

ころハ稚也山の稚々一く藤をまを云也。

見ふ山

十九 ころとことまらつらりくあたれいさむむひ夕さ

れをありまけころむひのまなむし山あり

畧解云。まなむはまを和也と云ふ也云。

宇乃花山

十 かん平のあふふむら山あなうなう舞

こわふのまら山をいさ也。後世のあふる名と和花



八景をくく奇人の心を得ず。

山のそき

地のそき

山のそきわ山のそき。地のそきわ地のそきと云々なり。  
こひをきと納めく。山のそき地のそきと云々也。(まの  
夢見るハ非也。

草津野

一 玉きり田の大野ふるなめてあまふますむを子田控

大  
十  
七

あけハありえの納め。流る地と云々なり。

イホシロサタ  
五百代田

ハ然と何れ五五代田を好まより田あやなれハ越前  
五五の敷多よと云。代ハ領れの納めく。今この領る山田といふ  
也。城をしち代をくると云は日領也。市代代綱代ホ  
の代これ日領なり。

チイリタ  
小壱田

土小壱田の板田の橋のうれぬ柳よりゆむな悪そ共妹  
をハつ初初より小よ祭也。壱田ハ新田よりそをハ張也。山田  
を并延る地を張といふ。①ハ新田の初。初壱小田

なといへり。

子抄田シカク

十六 花塚田の志々の稲を念ふつてて宛て稲とし其あらは  
志く田の麻の付田也。

小里チサト

十七 花塚田の志々の稲を念ふつてて宛て稲とし其あらは  
志く田の麻の付田也。外に登る形跡ありやと云  
袋ををと云。小島小池小島小池あり。小里のをも又あり。

夜まな美乃里

十八 やあなまのまよふやと云。りまあふふと云。れまは又まつや

畧解よあふなまのまよふ地名也と云。れと。教並と云。美乃里。  
行本跡生又まひるる里と云。袋なる。

海界ウチサカ

十九 水乃江の浦島子うかつをつり鯛泊るこわ七日まて取  
りかこすく海界をまきことありふらふらふのま  
うなまのうのまの也。のをかの裏不持すハ名と云。の定格  
なり。うのまをうかふと云。甲。うそのをを略し。

之麻未尔

二十 大乃江の浦島子うかつをつり鯛泊るこわ七日まて取  
りかこすく海界をまきことありふらふらふのま  
うなまのうのまの也。のをかの裏不持すハ名と云。の定格  
なり。うのまをうかふと云。甲。うそのをを略し。

畧解不云しすこいあ方のま也。浦へを浦等といふは日  
一又い末の後すくあまの。

邊

一むも若きぬきのあをきとばあれいしきぬきもあはる  
みれを白波さきく云

へしをへつおの物。色候あ影いふとちあなり。

アサカハ  
朝川  
エラカカ  
夕川

一福し、あ大急のあしをすきとあ一ああ大急人い舟  
なめて且川より舟きわひ夕川よりあま

一ともな

カハヒヒ  
可波俵

サ 秋とよまなひく可波俵のよこ字乃よこよのりも思わゆるも  
かまひを川急也と人皆いふ。これと在川びといふ川岸也。  
とねるゆ。びハべいの物もあふく。べのあまやあ地地つ山  
へおのべ。地山乃急り四方を指すといつるあまを後廣し。び  
ハ不聖徽のあなれいを後狭し。よろく山岸の物となる。  
けいひさま外もあゆ推く知ア。

イリツツナ  
酒潭

まじりあふこやあまきみをおくともあはれもあま

畧解ふ。片淵の流るる水と云ふ。

備溝ニケミ

土 芦竹のすくも地水もろき能疎の不見こえめやも  
まけこそを河へてる字の義あり。水のとあれもむ時お  
流ーやうべきなるなり流なり。まけをまうたの節。

熊来乃夜良クモキノヤラ

去 ちたきの熊来の夜良ふり屋寄ねと入りてひて  
たのしそ秘流ひりやとこもりー

畧解ふ云。和名抄云。能登郡熊来久万まき。やらハ上總下總  
の土人流流などの。芦竹生るるやうの水をやらと云ふ。

夜良ハ強良と云義也。①ハ定ぬこく水定ぬ義ありて  
流とも流とも異なるこよをいふなり。



もろい敷家集り付止りて不難と云義也。さへハ喉まで。橋り  
強ふ。強ひ付止ると云義也。さへ本集り生着りし道也  
もくもくもあも云。武名義推考ふりし道なり。

強強

土 強強ふりし道なり。たのふ橋りし道なり。さへも  
とゆまあハまも強也。やうを(也)と強めしとゆまも云。

与奇道

七 土名の強ありをも云。すは強ぬらふゆもよあはふ  
よきハ強也(也)ハ強也。そ方より強りある時。外のもあは  
を云。さへもよありてしなもいなり。よありの列強ハ。も強

上 十

本義又番

海津路

九 海津路のなまれむ時も強なり。かを強よ。あはすしや  
海津の(の)ハ脚解す。あは強よ。あは強と云義也。

強道

二 せと強のうらのみあはまのちの川せの底をえんはあは  
まのちの(の)人をも強よ。さへも強なり。さへも強なり。  
川強ハ。本義又番なり。

道之何回

二 ねえれおくもいなり。あはすハ進し。もあはの何回し。あは

まの強





五 是れは名よ地なるものうつしむるもるもあまをよめども  
うつハ動養の果しられすと云義也。うつハわらうつまく遊也。  
うつまく網もとり。①ハ初養也。②ハ不知果之詞也。

潮シホ方サ波ナ

一 遊ウツおウツらウツまウツこウツ母ウツ妹ウツのウツむウツあウツきウツ語ウツをウツ  
遊ウツまウツのウツ遊ウツ務ウツ務ウツおウツまウツまウツると云義也。今每人の沙汰也。  
云彩。右乃ハ不たぬなり。

塩シホ気ケ

九 塩シホ気ケ立ケありケまケいケあケれケ水ケのケ名ケハケ妹ケのケみケとケをケ  
しケわケらケあケくケらケまケのケ數ケありケ。塩シホ気ケ立ケまケるケをケ云ケ。塩シホ網ケとケ云ケ不ケ同ケし。

青アヲ月ナ浪ミ

ハ 青アヲ月ナ浪ミふミ中ミあミるミはミえミぬミきミ  
青アヲ波ミをミ大ミ海ミのミ波ミなり。白シロ波ミとミ云ミふミ事ミ也。青アヲ波ミといミふミ者ミ  
めミつミしミきミうミけミりミ拳ミ並ミり。

イイホホハハナナニニ  
ある重波

四 之シ崎シ廻シのシ荒シ破シもシ予シらシ者シ重シ波シをシもシあシるシもシあシりシ可シ及シ  
あるハまシりシ方シあシるシをシふシ。あシまシいシとシいシなり。波シをシ並シとシ同シ  
義シなり。

ハハママエエフフ  
浪木綿

四 ことまのうらの浪木綿ハマエフとなす心ハマエフをたよあひぬ

漢末の漢を本領しなすきとるなり。とる小後世所中後會  
 の説とも多し。またあるはなれり。六の各考考不  
 つきとるなり。

土右金玉火之部

直土ヒタツチ

五 ふせいのまけいのうちふせいといふまけい  
 ひろちのあそびのまけいのまけい。た地也と云ふ也。俗不  
 おとつり。ひこひつり也。ひこひつりひつりおのひこひつり。

真朱マッホ

十六 竹作のまけいといふ水濁る池田の船戸り白身の上をこれ  
 畧解云。志保まけいとも換へしき。まけい傷也。そけい外傷  
 牙も傷と云ふも。論じると云。かひ色の赤も也。朱も物も  
 してて色赤障りなるがふまけいと云。赤のそけい舟とも

いり。すのふとまい玉の着なるを云ふとまそと云ふの  
とき物とをなり。

向於懸村

一 河の舟の船村ふさむひさす常りものわとまそと云ふ  
ゆつハ震起後おほいせと云ふ。懸のむらりある形也。

常滑

二 是とあるより川の常滑のたのむなり又つらむ  
常滑ハ水中の山あり。常りなるもの也。

久我祿

十六 葦原の水穂のを天降りき吾大忌の禊人をいそ

ひのひよふるををらわひ一久我祿もたのしたく  
あむむ

くうねハ黄金也。くといふいまうの物と。黄動發と  
云ふなり。今このねと云いまね之物と。黄をみよ發  
のねと云員也。ねハ五をなり。

多麻伎能多麻

十五 船なり舟ををせむと云。這子なるもの。しなる  
目こつこのこまのものをあつふ妹よと云ふ。こ  
たまのハ子橋と云ふ。まよましく織と云員也。こをたと云ハ  
表裏の轉用して。子枕を束ち當おのたぬ同。





歳時昼夜之部

年乃柄

<sup>十六</sup> 株のなまよける柄をさかひ常<sup>一</sup>やあむいぬとりのいふ  
とりのたぐ年の始年の終せふ年の端なれは二途ありし  
く年のたとひなり。

年乃緒

土 あひせのぬ人のゆもふらあむのとのと長くあむをむ  
年の緒也<sup>十二</sup>月長く長くくちふ年の緒と云<sup>ト</sup>く年  
乃緒長くとりなり。

天之足夜

十三  
この世にいまとまきまはけなきあはれすあはれす  
あはれすえこそ天の思夜

是夜に夜の十かなる也。按の長よと云ふいあはれす  
きととのへるなり。

伎賊の夜

二  
え餅し神ふたねはと君恋る為をまきそのよあはれ  
とえつる。

きそのよの味口の夜也。名義の考ふなり。

加波多れ等伎

十  
あはれすのうをれあはれあはれをこあはれあはれす

上 十四

名義考ふなり。





一点へらひと刑へた會の義もく。家にも會集するさう。  
さらひをへらひらひの略言なり。直會をならひせ  
刑罰也。田刑をつめとぬもつめにあつまりの物言よ。是  
又古言とゆゆき也。さうらく古刑ふれ云く。つめはつまり  
えの物也。をつめをあつめの畧人の十人廿人をりつて  
は集るを云なり。七もけり神よりけり。さる物ひ  
あつとせあつなり。

耀歌

九もあまのつをばのよよとぬひくををぬをこのゆ  
きつをひらふひよ人つまふ見れはよちもき

耀歌者東俗語曰加貝我比。かほといふも是う。畧解ふ  
うひらけあひの畧也。は從物なり。

神依板

九 神依板の神依板ふす板の足ひもさす志の七ふ  
神依板ハ神依板来る板と云也。今も巫女のする業  
なり。

倭文帯

十九 天地の神ハなれやとゆりしすき三層ふとりけ倭文帯  
をふよとゆりしすき

倭文帯もてまきいする帯なり。

吉穂木綿

短木綿

二 吉山の山すまそゆわしうふかぬもくふちとむひ  
畧云。木綿の穀の皮也。あらくら冠羽者又云。木綿麻  
かと割る用此のものと云。その中ふゆをふめくまそ  
と云也。式にも木綿をさる麻をいやりあり。木綿のあまも  
短あまもを設る也。此命のこころふふくまそありま。

仏母 仏器之部

女 鐵鬼

男 鐵鬼

三 吉女寺の邪女とく大邱の男りきなりくま子うまいむ  
鐵鬼の枕名也。字之黃也。枕詭枕名ハ枕又禁せず古訣の  
なりひなり。

之 鐵鬼の使

五 吉女寺の邪女とく大邱の男りきなりくま子うまいむ  
一 之の使ハ黃泉の使と云。黄泉を修又冥途の使と云ふ  
也。一 下を根の也。

幡幢

吉野羅門の儀は小田をむすすまぬをこれと幡幢なり  
幡幢ハ竹具也。節の如くぬびる幡と云ふなり。

氏戸等

吉檀越や物もなしひも氏戸等哉とあるはこれなり  
畧云。其圖云。氏ハ良の儀。宣長云。氏ハ長の儀なり。此  
を良の儀とする。高戸木哉と云ふなり。氏戸を長  
の儀とする。高戸長木哉と訓の外。羅子等ハ新巡乃  
徒なれ。檀越やと云ふは。高戸をハ檀越と云ふ  
縁別。吉野の説物なり。

藥具之部

於久部岐

古くはむむ人のまゝのものなり。昔のむむをいふは  
とらと

考藥具の部よりいふなり。





上  
二十九

